
一通のメールから

うぐいふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一通のメールから

【Nコード】

N6059D

【作者名】

うぐいふみ

【あらすじ】

お笑い芸人辻占がドラマの撮影で訪れた古い洋館。目覚めると目の前に二つの見詰める眼があった。三十路の芸人コンビが遭遇したある夏の日の出来事。夏向けサスペンスホラー。

その一 丹原の帰宅（前書き）

この小説は以前うぐいふみが管理するサイト（<http://homepage3.nifty.com/littlejyodo/>）にて公開していた同タイトルの小説に修正・加筆した改定版です。
現在も上記サイトにて公開中。

改定に関する詳しい経緯、修正箇所などは上記サイトの小説ページ（作品解説）をご覧ください。

その一 丹原の帰宅

帰宅した丹原がメール確認のためパソコンの電源を入れると、そこには着信があった。

差出人の名を見て小首をかしげる。発信元は辻占だった。

丹原と辻占はお笑い芸人だ。

コンビ名は「つんた」。学生時代にコンビを組んでデビューして以来、のっぴで強面の丹原と小柄でベビーフェイスの辻占との温かみのある芸風が受けて人気を博し、現在もテレビのレギュラー番組を何本か持たせてもらっている。

同じ劇団に入ったことが縁でコンビを組み、若さに物を言わせて駆け抜けてきた芸能生活も今年で目出度く十五周年。二人とも見掛けはまだまだ若作りだが、そろそろ傍からはベテランと呼ばれる域に突入し、最近ではそれぞれ単独でのオフアールも多くなってきている。何事にも好奇心旺盛な丹原は情報・クイズ系のバラエティ番組に出演する傍ら所属劇団「月刊ひつじが丘」の運営に力を入れ、無類の映画好きで役者気質の辻占はこの数年で何本か映画に主演していた。

そんな二人は普段電話や携帯で互いに連絡を取り合うようなことは滅多にない。

携帯が生活の一部になっている若い世代とは違い、相方同士プライベートで頻繁に連絡を取り合う習慣がないのだ。話したいことがあれば顔を合わせたときに直接話せばよい。楽屋で、或いは番組のフリーストークの最中に二人で近況を語り合うのが最近では半ば習慣になっていた。

そんな辻占からのメールだ。しかも一通ではなく何通も来ている。いくら丹原がここ1週間ばかり旅番組のロケで日本を離れていた

とはいえ、珍しいことだった。

メールは間隔を置いて何通か、日付の新しいものは携帯からも来ているようだった。いたずらにしては手が込んでいる。辻占がプライベートでそんなマメなことをするとは思えなかった。

それじゃ、新手のドッキリかも。

そんなことを考えながら、丹原は日付の古いものから順に目を通してはじめた。一番古い日付は2日前のものだった。

【件名：丹原隆太様へ】 20XX/07/03 15:22

拝啓、丹原隆太様。

突然のメールで失礼します。

海外はどうですか。こちらは撮影も快調に進んでいます。

（何だ、この定型文例集から抜き出したような文章は……。）

丹原は苦笑する。

なんてな。

やっぱ、なんかてれくさいな。話し言葉で書くわ。

「是非そうしてくれ」

モニターの文字を目で追いながら丹原が呟く。

この間、番組でノートパソコン当たっただろ。それで今書いてます。

コンパクトでなかなか使い勝手がいいよ。気に入ってる。

アドレスは伊富から聞いた。ホント何でも知ってるよな。

オレはもう伊富がいなきゃなーんも出来ねーよ。いや、マジで。

実はロケが終って、ある地元の人のお家に招待されたんだ。

それがもう、すっげーの！

ものすごく古い洋館でさ、ホラー映画とかに出てきそうなんだ

よ。

それで聞いてみたらさ、実際に映画に使われたことあるんだって。

びっくりだよ。

なるほど、それでうれしくてメールしてきたんだ。あまりにマニアックな話題で他に相手になってくれる者もないのだろう。一人で人知れずはしゃいでる辻占の姿が目には浮かんだ。丹原の顔にも自然と笑みが漏れる。

これから歓迎パーティー開いてくれるって。
じゃあな。海外ロケ頑張ってください。

辻占

「へえ。古い洋館かあ。何の映画に使われたんだろ」
何にしても退屈しのぎが出来て辻占にとっては願ったりだろう。
丹原は次のメールを開く。

【件名：丹原隆太様へ 辻占だよ】 20XX/07/03 23:
56

そう言えば今気が付いたんだけどさ。お前がこのメール読む頃には、

ロケも終って、オレ達また顔を合わせてるんだよな。

やっぱり相方同士メールはあんまり意味ないか。

実はパーティーの後この洋館に泊まらせてもらえることになったんだ。

今、すっごく広い部屋に一人。いかにもって感じでちょっと恐い。

なんかさあ、夜中に誰かに見られてるような感じでさあ。

雰囲気飲まれちゃってるのかな、オレ。

でも、家主さんは老紳士って感じのとってもいい人だし。

ロケも明日で終り。朝は早いけど最後の一踏ん張り、頑張るぞ。

「勇気あるなあ、あいつ……」

丹原は思わずつぶやく。自分は絶対ダメだ。そんな所に一人でな
んて、眠れやしない。

「結局、一睡もできなかったら笑えるけどな」

三通目のメールを開く。

【件名：辻占】 20XX/07/04 06:42

おはよう、丹原。

これで、三度目になるけど、ごめんよ。

でも、一つ気になることがあるんだ。自分の気を落ち着かせる
ためにも書いておくよ。

今朝起きたら寝たときとカーテンの位置が違ってるんだ。

これどう思う？

泥棒でも入ったのかな？

でも、内鍵だし。

外から入れるとしたら可能性は一つだけだと思うけど、そんな
こと考えたくないし。

別になくなったものもないみたいだし。ま、いいか。

今日はもう東京に帰るんだから。

携帯の着メロが鳴っている。

「電話よ」

妻の呼ぶ声がした。いつものくせでジャンパーのポケットに手
やり、丹原は携帯を忘れてアメリカに渡ったことを思い出した。慌
てて自室から居間に戻る。

「携帯忘れてったんだ。どこだっけ？」

「テーブルの上にあるんじゃない？ 今日も何回か鳴ってたわよ。取りあえず充電だけはしといたけど」

掛けてきたのは辻占のマネージャー伊富だった。

「丹原さん？ ああ、よかった。何度掛けても出ないから……」

「ごめん、ごめん。携帯家に忘れちゃってさ。それで、なに？
こんな時間に」

時刻は9時を回っていた。

「ああ、そうなんです。辻占さんそっちに行ってませんか？」

「えっ、来てないけど？ どしたの」

「連絡取れないんですよ」

「え？」

「明日、収録があるでしょ。8時入りの」

「うん」

「確認しとこうと思って携帯に掛けたんですけど、つながらなくて」

明日は揃って特番の収録を行うことになっていた。伊富の話によれば、ロケは昨日のうちに無事終了。辻占の今日の予定は午前中オフ、午後は打ち合わせ。だが、その打ち合わせにも現れなかったらしい。事務所に心配した番組スタッフから連絡があったのだ。

「そしたら、1回だけ変なメールが……」

文面は一言、たすけて、と。

「おかしいでしょ？ 辻占さんこの手のいたずらする人じゃないし……」

そう。伊富の言う通り。

丹原は最初に辻占からのメールを見たときの違和感を思い出す。普段の辻占は穏やかで優しいけれどしゃれっけのない、極く普通の真面目で大人しい男なのだ。

「ちよつと待て」

丹原は慌てて自室のパソコンの前に戻った。残りのメールに急い

で目を通す。

【件名：辻占】 20XX/07/04 15:42

みんなと一緒にまた打ち上げに招待されたんだけど……。

なんかおかしいよ。

オレの思い違いだといけどさ、

パソコンのデスクトップの配置がオレの記憶と違ってるような気がするんだよね。

家主さんもやけにオレを引き留めてるような気がするし……。

【件名：】 20XX/07/05 17:29

部屋から出られなくなった！

パソコンもいつの間にかないし。

それにあの家主絶対変だよ！ おかしいよ！

「悪い、伊富。一旦切るぞ！」

切迫したものを感じて丹原は携帯の留守電を確認する。さっき妻が留守中に鳴っていたと言わなかったか？

着信【20XX/07/05 17:53】

入っていた伝言は。

「ちよつと、出掛けてくる！」

あつけにとられる妻を残して丹原は外に飛び出した。伊富に連絡を入れる。

「伊富、ロケ地だ！ 辻占はまだその古い洋館にいる！」

その二 真夏の戦慄

「どういうことなんですか、丹原さん。辻占さん昨日もう、東京に帰ったって……」

劇団事務所でマネージャー伊富・菱川と合流し、丹原は夜の街をワゴン車でロケ地に向かっていた。

「それ、辻占から直接聞いたのか？」

「いえ……」

運転席の伊富が首を横に振る。

「打ち上げパーティー開いてくれた洋館からちょっと離れた所にも映画に使われたことのある別荘があつて……。辻占さんそっちも見てみたいって出掛けたって、館のご主人から伝言が。帰りはそのまま送ってもらうから、先に帰れって……」

「騙されたんだよ」

「え？」

「あいつ、その洋館が気に入ったらしくて、珍しくオレのパソコンにメールで報告してたんだ。2日前から。読んだのはついさっきだけだよ」

丹原の表情は険しい。

「最後のメールは今日の5時半頃、携帯からだった。家主の様子がおかしい、部屋に閉じ込められたって」

「え……」

伊富の顔色が変わる。

「極め付がこれ」

丹原は携帯を取り出すと、伊富に聞こえるよう耳元で留守電を再生した。

流れてきたのは悲鳴に似た甲高い怒声。紛う事無き辻占の。

「……大変だ」

伊富がアクセルを踏む。

「とにかく、急げ」

菱川の手渡したペットボトルの水を一口含み、丹原は夜の高速の遙か前方を睨みつけた。

心の中でずっと悲鳴をあげ続けながら、辻占はなんとか自分の身を守ることに成功していた。

そこは小さな地下室のようなところ。

部屋のたった一つの出入り口である扉の前には、辻占が必死の思いで積み上げた机や椅子、本棚等が小山をなしている。

部屋の中はコンクリートがむき出しで、夏だというのにひんやりと冷たい。部屋の北側、丁度辻占の目線の辺りに曇りガラスをはめた小さな窓が一つ。そこから淡く微かな外の星明かりが漏れてくる。

辻占がここに逃げ込んだのは日が落ちる前だった。あれからどのくらいの時間が経ったのだろう。もう部屋の中は真っ暗だった。最初は扉の向こうでしつこく出てくるように促していたこの屋敷の主人も、今は近くにいない気配がない。

足に鈍痛を感じて辻占は自分が奥の壁に張り付いたまま数時間立ちっぱなしだったことに気付いた。パニック状態だったのだろう。我ながら間抜けな姿だと思った。幾分震え気味に大きく息を吐き、ゆっくりと床に腰をおろす。コンクリートの床は氷室のように冷たく感じる。その冷たさに辻占は今日の夕方、目覚めたときの戦慄を思い出して身震いした。

辻占が目覚めると、そこには目があった。

見つめる二つの眼。それが一体何を意味するのか理解できるまでに数秒かった。

「ひっ……！」

引きつった悲鳴を上げて、辻占は半身を起こした。瞬間移動かと思われる程の恐ろしい勢いでそのまま後退る。そこで気付いた。

ない……！

辻占は何一つ身に付けていなかった。

自分の視界に自身のむき出しの白い腕と太もがある。その先にはベッドに横たわり、自分を見つめる二つの眼。

たちまち羞恥心が頭をもたげる。辻占は反射的に近くにあった枕で身体を隠し、取りあえずの抗議の声を上げた。

「なななな、何ですかっ、あなた！？」

「おやおや。驚かせてしまいましたかな？」

ロマンスグレイのこの家の主人は何事もなかったようにゆっくりと身体を起こした。

いつもと変わらぬ落ち着きぶり。きちんとした身なりをしている。この男だけを見ているとおかしいのは自分の方なのではとさえ思えてくる。

それでもこの状況は絶対に尋常じゃない。

辻占の健全な平衡感覚が人生最大級の警鐘をガンガン鳴らす。

「ぼ、僕の着ていたものはどうしたんですか……？」

相手の様子を警戒し、ベッドの上をゆっくり後へいざりながら辻占が尋ねた。

「ああ、それならクリーニングに出しました。ズボンが汚れてしまったので」

「よ、汚れた……？」

思わず声が裏返る。辻占には身に覚えがなかった。

ロケが終り、打ち上げに参加して、それから……。

それから先の記憶がない……！

家主が意味あり気を含み笑いをするのを見て、辻占は真っ青になった。思わず股間を押さえる。

（ま、まさか……！）

全身からどつと汗が噴きだす感覚。

（なつ、何もされてないよな、オレッ！！？）

しかし、こんなところで相槌を打ってくれる者などいるわけもなく、必死に記憶を探るも悲しい事にさっぱり覚えがない。

「と、とにかく何か着るもの貸してくれませんか。それと、何か食べる物……」

動揺を必死で押さえ付け、辻占は苦し紛れに要求した。とにかく一度一人になる必要がある。自分の気を落ち着かせるためにも、大勢を立て直すためにも。腹は実際に減っていた。今はいったい何時なのだろうか。

「ああ、そうでした。お茶に起こしてさしあげようとして来たのでした。あまりに寝顔が可愛いので、つい見とれてしまいましたな」

それで裸の三十男に添寝をしたというのだろうか、この男は……。辻占の背筋を冷たいものがぞつと走り抜ける。

「いま、こちらにお持ちしますから。少々お待ちを」

家主はそう言い置くと優雅に挨拶をして部屋を出ていった。直後にガチャリ、と鍵を締める音。どうやら辻占をここから出す気はないようだった。

家主の足音が遠ざかるのを確認すると、辻占は取りあえずベッドのシーツを剥がして身体に巻き付け、部屋の中を探索し始めた。

南向きが全面ガラス張りのサンルームのような造りの部屋だ。扉は主人が先ほど退出していったものが一つ。南側の窓の鍵も全部外側から固定されているようだ。あれだけいたスタッフや関係者はどこに行ったのか、余人の気配もまったくなかった。辻占のパソコンやその他の持ち物も影も形もない。諦めきれずに床の上も探していると、ベッドの下に携帯を見つけた。多分、服を持って出るとき落としていったのに気が付かなかったのだろう。手を伸ばし、やつとの思いで拾い上げる。電源を入れ液晶表示を見て、ほとんどまる一日寝ていたことを知った。今日は打ち合わせもあったのにすっぱかしてしまっただ。ここで初めて辻占に怒りが込み上げてきた。

こんなことで仕事に穴を空けるなんて……！

とにかく、家主が戻って来る前に今の状況を誰かに知らせなくてはならない。マネージャー伊富に連絡を入れようとして辻占は愕然とした。メモリが全部削除されているのだ。

伊富の携帯も事務所の電話番号もうる覚えだった。唯一ちゃんと覚えているのは、ここどころパソコンで頻繁にメールを送っていた丹原のメールアドレス。丹原は今日帰国のはず。辻占は一縷の望みを託して丹原にメールを打った。次いで、伊富の携帯番号をブツシュし始める。うる覚えだが、こうなったら思い付く限りの組み合わせで掛けてみるつもりだった。間違いを気にしている余裕はない。数撃ちや当たる大作戦である。

扉の向こうで物音がした。

どきりと心臓が波を打つ。作業を中断し、携帯を急いで後ろ手に隠す。

鍵を開ける音がして、主人がワゴンを押して入ってきた。ワゴンの上にはサンドイッチ等の軽食とティーセットが一式のみ。どうやら辻占に衣服を与える気はないようだった。うんちくを傾けながら手慣れた様子で主人は紅茶を入れ始める。

辻占は主人に悟られないよう手探りで慎重に携帯のキーを押す。

この状況では声は出せない。メールに切り替える。

「さあ、どうぞ。冷めないうちに」

主人が辻占に紅茶を勧めた。ゆっくりと慎重に左手でカップを持ち上げた辻占に、笑みを浮かべて主人が歩み寄る。

「その後ろに回した手に何をお持ちですか？」

辻占の顔からさっと血の気が引いた。今携帯を取り上げられたら外との連絡が一切取れなくなる。

迷ったのは一瞬だった。

辻占は身に纏っていたシーツを頭から被り直すと、南側の飾り窓に向かって牡鹿のようにジャンプした。枠ごと窓をぶち破る。古い建物であったことが幸いし枠は難なく砕けた。無数のガラスの破片

と共に庭の芝生の上に転がり出た辻占は、すぐさま起き上がり建物を背にして全力で駆け出す。

この一連の動作をこの家の主人は身じろぎもせず、ただ呆けたように見ていた。そして、辻占の姿が視界から消える頃、夢見るようにやっと呟いたのだった。

「すばらしい……！」

その三 忘我の館

辻占は出口を探して走った。

この屋敷はとにかく敷地が広い。雑木林の中に建物が建っており、自分がどこにいるのか正確なところはわからなかった。とにかく日がある内になんとかしなくては。暗くなったら更に事態は困難になると予想がついた。

焦って辺りを見回すと、前方に苔むした赤い煉瓦造りの壁のようなものが見えた。敷地の境界に違いない。辻占は急いで壁に駆け寄った。取っ掛けかりになりそうな凹凸はない。小柄な辻占ではジャンプしただけでは天辺に手が届かなかった。近くに登坂の助けになりそうな樹も生えていない。

後方からの物音に気付いて振り向くと、遠くに主人が迫ってくるのが見えた。

辻占は壁に沿って走り出す。壁ならどこかで門に通じているはずだ。だが、体力が限界に近づいていた。昨日から何も食べていない力が出なかった。裸足のうえに、そろそろと長いシーツを引きずり足がもつれる。背後からは主人の足音が近づいて来る。

万事休すか、と思ったそのとき辻占の脳裏で何かが弾け、とある記憶が蘇ってきた。

番組の企画で新しい携帯に買い替え、試しに丹原の携帯にかけた、あのときのことか！

辻占は縋る思いで記憶のままにキーを押した。

呼び出し音。

繋がった！

「つんたの丹原です。只今外出しております。……」

懐かしい相方の声が聞こえたその途端、足元をすくわれて辻占は転倒した。携帯が手を離れる。

「まだ、携帯なんてお持ちでしたか？」

振り向けば、自分の太ももをしっかりと抱え込んで放さないこの家の主人。

悲鳴が口を突いて出る。

「放せッ！」

「いえいえ、放しませんよ。せっかく捕まえたのですから」

この状況で笑みを絶やさないこの男の精神構造に鳥肌が立った。

「放せッつつてんだろッ！！」

辻占は半狂乱になってメチャクチャに身をもがいた。一瞬の隙について相手を蹴り倒し、なおもシーツの端をしっかりと握って放さない男の、その手を蹴って振り切った。

その後敷地の中を当てもなく必死に逃げ回り、多分離れか何かなのだろうこの小さな建物の地下に逃げ込んだのだ。

あの電話は確実に丹原の携帯に繋がった。留守電にはなっていたけれど、いずれチェックはされるはず。

今ごろ探してくれてるだろうか……。

今は丹原を信じて待つしかない、と思ったそのときだった。

ガシャン！！

と大きな音がしたかと思うと、北側の小窓の曇りガラスが砕け散った。思わずシーツを盾に破片を除ける。目も眩むまぶしい光が部屋に差し込み、

「辻占さ〜ん」

聞き覚えのある低い猫なで声がした。ビクリ、と辻占のうなじの辺りが震える。

ガシャン！！

もう一度ガラスが砕け散る。

砕けたガラス窓から逆さまに二つの眼が覗き、辻占を凝視した。

無言の悲鳴を上げて辻占が反対側の部屋の隅に張り付く。がたがたと恐怖のために全身が小刻みに震えた。

「そんなに震えなくても大丈夫ですよ。可哀相に」

目許だけを見せて、逆さのまま主人は笑った。

「今、そこから出してあげますからね」

「く、来んなっ!!」

辻占が思わず叫ぶ。それには答えず、主人の顔は窓から姿を消した。変わりにチラリと見えたのは趣味のよい革靴と、何か斧のような武骨な刃物の一部。

辻占は戦慄した。反射的に扉の前の小山に駆け寄る。

どんッ!

と、大きな音がした。目の前の分厚い木製扉にマツチ棒ほどの亀裂が入る。慌てて手前の本棚を押さえる。ガンッと、今度は扉が揺れた。続けて、第2波、第3波。

「やめろッ! やめろよッ!!」

目をつぶって必死で本棚を押さえ付ける辻占の身体にも振動が伝わる。ぐらぐらと頭が揺れ、吐き気がした。

「辻占さ〜ん」

間近な声に思わず顔を上げる。すると扉の亀裂越しにこの家の主人と目が合った。

「来るなああああーッ!!」

アイツがこの部屋に入ってきたらもう終りだ!

下を向いて腕を突き出し、渾身の力を込めて本棚を外側へ押す。しかし、主人の力は尋常ではなかった。扉はいつの間にかその用をなさなくなり、主人の上半身が逆光の下、乗り出すように部屋の内部に侵入する。手にした斧で次ぎなる障害、オーク製の机に一撃を加えた。

「もうすぐですよ、辻占さん……」

真つ二つに割れた机を半壊した扉ごと蹴散らし、主人の顔が間近に迫る。

「すぐに出してあげますからね……」

もう限界だった。辻占は支えていた本棚から手を離し、悲鳴を上

げて部屋の隅に逃げ込んだ。そこらに散乱する本や花瓶を手当たり次第に投げ付ける。

「く、来るなあッ!!」

分厚いハードカバーの本が命中し、主人の額が切れた。血が滴つて、コンクリートの床に赤黒い染みを作る。

「さあ、もう大丈夫ですよ……」

笑っている。この男にとっては相手の感情どころか自分の身の安全さえも、最早どうでもよいことなのだ。

「い、嫌だあああああーっ!!」

渾身の悲鳴で拒絶する辻占に、本棚を蹴倒し主人が一步踏み出したそのときだった。

「菱川、体当たりだッ!」

聞き覚えのある声がしたと思うと大きな塊が入り口から飛び込んできた。それは、今しも辻占の身体に触れようとしていた主人を付近の残骸ごと奥へ突き飛ばした。嫌悪感から辻占がそれを光速で除ける。どん、と壁にぶつかった音がして、主人はその場に昏倒した。「ふう〜っ。大丈夫ですか、辻占さん」

あまりのことに言葉も出ない辻占をよそに、「月刊ひつじが丘」が誇る巨漢の敏腕マネージャー菱川は額の汗を拭き拭き、階段を降りてくる一団に手招きをしたのだった。

「辻占ッ!」

警官を押しつけて丹原が現れた。表情が険しい。が、辻占を一目見るなりその表情が一変した。

「……なんだお前、そのカッコ……」

その丹原の顔を見て、辻占は幾分震え気味の声を搾り出す。

「なあんだって……言われても……」

素っ裸にシーツを巻き付け、裸足の脚は泥だらけ。白い肌にあちこち擦り傷を作った、もう四捨五入すれば四十だというのにどこか頼り無げな、洗いざらしの子供のような辻占の姿に、丹原は自分の

口元が緩んでくるのを禁じえなかった。

「も〜お、やだ……。こんなの……」

気が抜けたのか辻占が丹原の前にへたり込む。

「大丈夫か、お前。何だよ、今の声。俺、一瞬やられちゃったのかと思ったよ」

何故か口元が緩んでいる丹原に、突っ込む気力もなく辻占は力なく笑った。

「やられてないよ。なんか知んないけど、オレ必死になると女みたいな声が出ちゃうんだよ……」

軽く声を上げて笑い、丹原は立ち上がらせようと座り込んでいる辻占の腕を取った。

「ほれ、行くぞ。入りまで時間がないんだ。しゃんとしろよ。腰抜けたのか？」

それでもなかなか立ち上がらない様子の辻占を見て、丹原は菱川を呼ぶ。

「菱川、悪いけどコイツ車まで負ぶってやって」

「辻占さん、どうぞ。乗ってください」

巨体の菱川が腰をかがめ、その広い背を差し出す。背中にしがみついた辻占にどこから出したか伊富が毛布を掛けた。

「暑いよ、伊富……」

「いいえ。弱つてるところにまた風邪を引くといけませんから。

とにかく、これ飲んだら寝て下さい。寝て起きたら何か食べる物を差し上げます」

伊富が差し出したのは栄養ドリンク。独り者の辻占にとってあるときは母親、またあるときは女房代わり。どんな時でも用意周到なこちらもまた敏腕マネージャーなのだ。

「わかったよ」

辻占は笑った。

「ごめんね、伊富。世話かけて」

どういたしまして、と伊富は笑う。

「慣れてますから」

「なんだ、お前。日頃そんなに伊富に迷惑かけてんのか？」
混ぜっ返す丹原に、

「かけてねえよ」

辻占がちよつと気だるそうに笑って反論する。その辻占に相槌を打ちながら、

「そうですよねえ。たまに大迷惑かけるくらいで」

と、伊富が澄まして言うのを見て丹原は笑った。菱川もなんだか小刻みに揺れている。その心地よい揺れに身を任せながら、疲労困ぱいの辻占はあつという間に夢の世界に誘われていったのだった。

さて、この話には後日談がある。

入り時間には何とか間に合い、収録も無事に済んだ二人。

しかし、寝不足と極度の疲労のためこの日の辻占のカメラ映りはかつてないほどに酷く、これがまたファンの間で様々な憶測を生み、ネット上でいろいろと議論を醸すことになったのであった。

完結編 楽屋裏

「よう、辻占。調子どう？」

丹原が控え室の扉を開けると、辻占が座椅子に背をもたれさせ両足を投げ出して座っているのが見えた。

「ああ……。うん、なんとかいけそう。ここに来る間ずっと寝てたし……」

辻占はあの直後三十八度近い熱を出した。一時は特番の出演を取りやめるといふ話も出たのだったが、これもプロ根性なのか地元警察の事情聴取を済ませ、都内に着く頃には発熱もおさまり、確かに今は地下室で発見したときのことを思えば顔色もずいぶんと良くなっているようだ。

伊富が辻占の足の裏に薬を塗り直していた。裸足でガラスの破片を踏んだため、両足ともにずいぶん切れている。痛そうだ。丹原はそつと顔を背けた。見てしまったことをちよつと後悔する。

「その足で立ちつばなしは辛いんじゃないの？ 椅子、頼もつか？」

「緊張してれば大丈夫だと思うけど。もう切ってから何時間もこの状態でいたんだし」

今更、と当の本人は意外とけろりとしている。辻占のこういふところは丹原には到底まねできないところだ。

「それよりさ、この顔だよ。ひっでえなあ、これっ」

辻占は備え付けの姿見を覗き込んでばやいた。

確かに酷い。二日酔いに加えて下痢でもしたらこんな感じになるだろうか。鏡に映った辻占はやつれた感じが否めない。

「放送コード、ギリの顔だよ」

辻占の呟きに丹原も思わず笑ってしまう。

「なんか、描いて出た方がいいんじゃないの」

「ヒゲとかシワとか？」

「いや、もつと。タヌキとかパンダとか、いつそのこと着ぐるみ着てさあ。その方が映りがいいんじゃないの？」

鏡を見ながら辻占も笑う。

「確かに。この顔はヒツドイわ」

「あ、そうだ。お前に聞きたいことあったんだ」

丹原は思い出したように、鏡から辻占本人に目を転じた。

「なに？」

「お前さ、あの時携帯使えたのなら何で一番先に警察に掛けなかったんだよ」

「あ……！」

「あつて、お前……」

「……全つ然、思い付かなかった……」

呆然とした態の辻占をしばし見つめ、丹原は心底呆れたように首を振った。

「もう、おま……、ホントにお前は……」

その相方を慌てて遮り、

「待て待て！　だつて！」

ここは自分の名誉のためとばかりに辻占は弁明した。

「だって、仕事すつぽかしたつて思ったらさ、一番先に事務所かスタッフに連絡入れなきゃって！　なつ、それって当然だろ？！」

丹原がやれやれと溜息を吐く。

「お前はさ、ホント天然だよ」

「え？」

辻占は不服そうに眉間に皺を寄せた。伊富を見る。

「オレ間違つてないよな、伊富？　人として」

水を向けられた伊富。包帯を巻き終え、俯いて救急箱をしまうその肩が何故か小刻みに震えている。

「あつ、コンノヤロー。なんでそこで笑うんだよ」

「あのな、」

半笑いで伊富を睨付けそれでもまだ不服そうな辻占に丹原が釘を

刺した。

「命と仕事天秤に掛けないで下さい」

「なんだよ。結局、オレなのかよ」

既に説教モードの丹原を見上げて、諦めたように辻占が笑った。

「大体お前はさ、常日ごろから……」

だんだんと熱のこもる丹原の声。それを背中では聞きながら、救急箱を手にして伊富は音もなく廊下に滑り出た。そっと控え室の扉を閉める。と、向いの丹原の控え室から出てきた菱川と目が合った。

「丹原さん知らない？」

「今、辻占さんそこ」

「なんだ。それじゃ当分出てこないかな。辻占さんが眠っている間中、ずっと何か言いたそうだったから」

「うん。ほっとけばいいよ」

伊富と菱川は笑って左右に別れる。

辻占の控え室から人の出てくる気配はまだない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6059d/>

一通のメールから

2010年10月9日22時55分発行